

49

## 「東京府下死亡一週表」等の新資料にみる 明治中期東京の週(月)・年齢・地区別死亡

逢見 憲一

国立保健医療科学院生涯健康研究部

**【目的】** 東京府(市)の死亡週報(月報)などの新資料を分析し、わが国の明治期以降の人口転換・疾病構造転換の過程を定量的に明らかにする。

**【資料】** 「東京府下死亡一週表」、「東京市内死亡一週表」および「東京府下死亡月表」とした(後二者は総会で報告する)。

**【方法】** 資料の所在を含め発行機関、期間、号数、様式、項目等の書誌的分析を行った。また、年計死亡数等の基本的な統計内容について「東京府統計書」および内務省衛生局「衛生局年報」の統計と比較検討した。さらに、週(月・日)別死亡について、1886年のコレラ流行および1889-91年のインフルエンザ流行による超過死亡も含めて分析・検討した。

**【結果】** 1. 書誌的分析 「東京府下死亡一週表」は、東京都公文書館において、1886(明治19)年分(第79~130号)、1889(明治22)年分(第235~286号)および1891(明治24)年分(第339~391号)が確認された。記載されている内容は、各号において死亡の原因別、男女別、年齢階級別、郡区別の各死亡数、人口、死産数、過去の同時期の週別死亡数、各日毎の気象(気圧、気温、湿度、風向、風速、天候、雨量)であった。1891(明治24)年分については、上述の内容に加えて日毎午前午後の気象および日別の死亡数も記載されていた。

2. 基本的統計内容 「一週表」の週死亡数を1日あたりに平均した死亡数の年計と、「東京府統計書」の現住者死亡数および病死者死亡数、さらに「衛生局年報」における東京府の死亡数を比較すると、1886(明治19)年には東京府統計書の病死者死亡数と衛生局年報の東京府死亡数はともに45,289人と一致しており、1887(明治20)年および1888(明治21)年も同様に各々29,967人、32,346人と一致していた。また、1891(明治24)年の日別死亡を年計した値と東京府統計書病死者の死亡数も、ともに37,044人と一致していた。

3. 週(月・日)別死亡の分析 1886(明治19)年はコレラ流行年であるが、「一週表」にも同年6月6~12日の週から11月11~17日の週までコレラ(「亜細亜虎列刺」)の死亡が記載されていた。コレラ死亡の合計は9,254人、同期間の超過死亡(前後各2年の平均週別死亡との差の合計)は11,185人であった。超過死亡は流行初期にも比較的多くみられていた。1889(明治22)年から1891(明治24)年は世界的にインフルエンザ(旧“ロシアかぜ”)が流行したが、「一週表」によれば1889(明治22)年暮れから翌1890(明治23)年春および同1890(明治23)年12月中は1日あたり平均死亡数が100人を超える週・月はみられなかった。しかし、翌1891(明治24)年1月3日から2月20日まででは289人(1月26日)をピークに死亡数が100人以上の日が続いていた。1891(明治24)年1,2月の超過死亡(前年の平均日別死亡との差の合計)は4,439人であった。

**【考察】** 「東京府下死亡一週表」が気象情報を大きく扱っていたことは、生気象あるいは「瘴気(ミアズマ)説」への関心を窺わせ、「一週表」が英国の死亡週報に範を取っていた可能性を示唆している。「一週表」に用いられた死亡統計は、東京府統計書の病死者死亡数および衛生局年報の死亡統計と共通していた可能性がある。また、1886(明治19)年のコレラ流行による超過死亡は約1万1千人で、表中のコレラ死亡を先取りかつ上回っていたこと、1889-91年の世界的インフルエンザ流行に際して、東京での流行は1891(明治24)年1月に始まったと推察され、超過死亡は約4千人だったこと、などが明らかになった。